

■（６７）取材・執筆の出発点は「仮見出し」

社会科見学で訪れた子どもらに、新聞社内を案内し、新聞ができるまでの流れを説明したことがある。記者がメモ帳を持って取材し、パソコンで原稿を書き、編集者がコンピューターで見出しをつけて、輪転機で印刷する…が基本だ。ただ、頭の中はちょっと違う。

記者は取材している段階から、どんな見出しが立つかを考えるように指導される。見出しは記事で伝えたいポイントを端的に表現した言葉。それを最初から考えていれば、何がニュースの焦点かが頭の中で整理できる。文章を書く時も同じで、まず、見出しから書き始める。編集者がつける正式な見出しではないので、朝日新聞では「仮見出し」と呼んでいる。わかりやすい仮見出しをつけられたら、文章はまず大丈夫。逆に仮見出しが思いつかない段階は、まだ取材不足だ。書き上げて送信した記事に、編集者が仮見出しと同じような見出しをつけてくれたならば、「わかりやすい原稿」を書けたという証しにもなる。

受験シーズン真っ盛り。小論文など自分の考えを書かせる設問も多いはず。まず「仮見出し」をはっきりさせてから鉛筆を動かすのも、一つの対策かもしれません（山）